

# 白醉庵吉村観阿について

宮武慶之

はじめに

吉村（芳村）観阿（一七六五—一八四八）は江戸時代後期に活躍した江戸の町人数寄者である。<sup>①</sup>従来の研究では父の代に芳村に改めた経緯から芳村または吉村と表記されるが、本稿では晩年に本人が「吉村」を自署として用いていた点から本来の吉村と表記する。観阿の行状としては、同人が所持していた俊乗房重源（一一二—一二〇六）による東大寺再建のための勸進状を東大寺に寄進し、その功績から敷地内への寿蔵の建立を許されたこと、松江藩七代藩主松平治郷（不昧／一七五—一八一八）の茶会に四十回参会したこと、<sup>②</sup>八十歳の年賀に際し好みの茶器を蒔絵師、原羊遊齋（一七六九—一八四五）に依頼して「一閑張桃之絵細棗」百二十五個作成させた

ことが知られている。観阿の寿蔵は東大寺勸学院にあり、没後にさらに碑文が加えられた。このほか、向島弘福寺にも観阿と妻観勢の墓碑があること、築地福泉寺に吉村家の墓所があったことはわかっていた。

観阿に関し忘我逸人は、観阿の言動を後世記録した「白醉庵数寄ものかたり」を紹介している。<sup>③</sup>本書には観阿が関係した美術品、大名等の記述があるほか、歌舞伎役者と茶の湯、羊遊齋に関する記述があり、観阿研究としてよりもむしろ当時の資料としての価値を有している。

その後、観阿の茶人としての行状に注目したが、近代の数寄者で茶道研究を行なった高橋箒庵（義雄）である。箒庵の『東都茶会記』（二九一六）には観阿の行状について次のような記述がある。

不昧公の愛顧を受けて、公の茶会に最も多く出席したる芳村観阿は、当時奇茶人としても鑑定家としても共に知られたる人物なり。彼は江戸の人にて太郎兵衛と称し、物外又は指月齋の号あり、茶道の方にては聴笙の名あり。是れは袁宗道が炉火に添ふて瓶笙を聴くの記事に取れりとかや。彼は当初富裕にして多くの書画器物を所持せしが、居常俗事を厭ひ、三十四歳の時、俄に遁世の思ひ立所蔵の珍宝を友人等に頒与し、折柄懐妊中の妻を棄てて出家得度の上、草廬を浅草田圃に結びて自ら白醉庵と号せりとぞ。彼は奇行を以て不昧公に知られ、又溝口伯爵家の先代にて翠濤と号したる君公の信任を受けしかば、溝口家の茶器は雑器に至るまで白醉庵の箱書せしもの多し。但し白醉庵が溝口主公の愛顧を蒙りたるは彼が晩年の事にして、余の所蔵御本兎耳香炉の箱書付に「翠濤尊君草廬に初めて御入りの節、床に飾り置き候を御所望にて進献す、天保十年亥中春七十五翁白醉庵観阿」とあり。彼は最も鑑識に長じ其手を経たる道具には曾て疑わしき者なしと評判せられければ、奇茶人鑑識家として其長命なりし、晩年まで同人の尊重する所と為りたりと云ふ。彼は出家の際、其所蔵品を友人に分与したれども、南都東大寺再建の際、俊乗坊重源が自ら認めたりと云ふ勸進状一冊を手許に残して愛惜措かず、常に其身を離さざりしが、此事東大寺の大勸進公般上人の聞知する処と為り、東大寺中興の弘徳俊乗坊

の遺物とありては、寺宝是れより尊きはなし、千金を以て是非に譲り受けたしとの申入れありたるに、観阿は自ら往きて上人に謁し、拙者祖先は大和国より出で六世前に江戸に移りたる由なれば、其祖先の国たる大和に骨を埋むるは拙者畢竟の本願なり、上人若し本山に於て拙者に方丈の地を賜はらば、勸進状は喜んで奉納せんと言ひ出たるに、上人大に喜びて東大寺内に彼が寿蔵の碑を立つる事を許せり。茲に於て亀田鵬齋文を作り、酒井抱一題額及び其文を書し、白醉庵観阿道人と題する石碑は、文化十四年を以て奈良の東大寺に建てられぬ。彼は斯く一風変りたる人物なると其鑑識の群を抜けるとに依りて、深く不昧公の信任を受け、公の茶会記中に記載せらるゝのみにても、彼が公の茶会に出席したるは実に四十回に上れりと云ふ。公が茶事に広く知友を求めて書画器物等を研鑽したるは、当時公の周囲に圍繞したる人物を見て之を知ることを得べく、而して観阿の如きは此等人物中最も奇絶なる者なるべし。<sup>5)</sup>

観阿は不昧の茶会に四十回参会しているが、これは招かれた人物中最も多い。不昧から深く愛顧された人物であったことがわかる。そればかりでなく、晩年には溝口翠濤すなわち新発田藩十代藩主溝口直諒（一七九九—一八五八）の信任も受けており、溝口家の多くの茶道具から雑器にいたるまで、観阿による箱書があったとされる。<sup>6)</sup>

そのひとつが箒庵の所持していた御本兎耳香炉で、翠濤が浅草の白醉庵を訪れた際に献上されたものである。観阿は出家に際し、所有した書画類を知友に頒与したが、重源による勸進状は手許に残した。後年になり観阿の先祖が奈良出身であることから、東大寺に寄進する。以上がおおよそ観阿の行状として述べられている。

このほか、美術史家の相見香雨は東大寺勸学院にある観阿の寿蔵および弘福寺の墓碑から行状を明らかにし、また観阿の言動を後世に記録した『白醉庵筆記』を紹介している。大阪の新聞記者であった中井浩水（新三郎）が、観阿関係作品のコレクターであった川瀬無窮亭の所蔵する観阿自作品および関係する作品を紹介するとともに、東大寺四月堂に安置される観阿の位牌について報告している。観阿による自作品が多く存在している点に注目したのが満岡忠成と邑木千以である。満岡は相見と同じく寿蔵および弘福寺墓碑から観阿の行状を紹介するとともに、川瀬無窮亭の所蔵品を紹介している。邑木は観阿関係作品を紹介し、「若草」と銘のある自作茶碗について紹介している。このほか郷家忠臣は、原羊遊齋研究のなかで、「一閑張桃之絵細棗」との関係から観阿を紹介している。

ところで向島弘福寺には観阿と妻である観勢の墓があった。この墓は観阿が嘉永元年（一八四八）に没したときに建てられた。観阿の墓には、吉原の名主であった西村貌庵（一七八四—一八五三）による墓標があったという。墓標には観阿が過ごした庵について次の

ような記述がある。

庵中扁額は不昧源君筆を染て、楽中苦苦中樂と書せらる、又繼ぐに翠濤源君其他名家列侯も常に庵中をとひて消日の樂となす

観阿の庵には松平不昧による「楽中苦苦中樂」の扁額が掛けられていた。またこのことから、観阿は「苦楽翁」と自ら称したことがわかる。この庵には溝口翠濤をはじめとする人物が出入りしていた。

新潟の郷土史家である宮柴二は、北方文化博物館で展示した観阿作の茶碗や茶杓など九件を紹介しているものの、観阿の詳しい行状については明らかにしていない。

このように先行研究では、観阿が江戸時代後期の主要な茶人であるにもかかわらず、資料の不足からその行状が明らかにされていない。観阿は町人数寄者であったが「道具目利き」として茶の湯文化では重要視される人物であり、松平家や溝口家の茶道具蒐集にも関与していたとされる。観阿が関与した作品を研究することによって、これまで明らかになっていない観阿の行状、観阿を取り巻く当時の茶の湯文化を明らかにできるものと考ええる。

そこで本稿では、次の四点に注目する。

一点目は観阿が東大寺に勸進状を寄進し、そのほか墓碑文から信

仰の篤い人物として紹介されている点。この点に注目したとき、観阿が法隆寺に弘法大師額箱を寄進していることを確認した。また額箱には朱漆で観阿と妻子の署名が確認できることから、妻子についても検討する。

二点目は観阿と不昧、翠濤との交流である。弘福寺にあつた墓碑中、観阿と深い関係のあつた不昧および翠濤の名前がすでに確認できる。不昧は文化元年（一八〇四）十月二十七日に谷園中大茶湯を行なっており、このとき観阿は利休堂席を担当している。そこで当日の茶会で使用された道具を記録した茶会記を検討する。観阿と翠濤の交流については、東京大学史料編纂所が所蔵する溝口家史料を中心に検討する。同史料には観阿に関する記述が多くみられる。

三点目は観阿の八十賀の茶会である。従来の研究から観阿の八十賀にまつわる行状としては、羊遊齋に依頼して「一閑張桃之絵細棗」を百二十五個作成させ、箱墨書を観阿自身が行ない、親しい知友に配布したことがよく知られている。しかしながら観阿八十賀と細棗についてそれ以上のことはわかっていない。今回の調査では新出の資料である観阿による八十賀茶会記を確認したため、この茶会について明らかにする。

四点目は観阿による道具の取次ぎについてである。「白酔庵数寄ものかたり」でも述べられるように、観阿は道具を諸大名などに売却する取次ぎをしていた。しかし実際どのような作品を取り次いで

いたのかは必ずしも明らかでない。そこで先述の溝口家史料から観阿が同家に取り次いだ作品を明らかにする。また溝口家旧蔵品とされる作品の特色として、観阿による箱墨書が多くみられる。同家旧蔵品のうち現存する作品および売立目録に所載される作品から、観阿の箱墨書がある作品を検討する。観阿は茶の文化では目利きとして著名であるが、所持もしくは売却に関係した作品を明らかにすることで、その所以を明らかにしたい。

## 一 観阿の行状

ここでは東大寺勸学院にある観阿の寿蔵および弘福寺にあつた墓碑銘（付録3）から、その略歴を記しておきたい。

勸学院寿蔵の墓題（付録1）は亀田鵬齋（二七五二—一八二六）、「白酔庵観阿居士之墓」の墓碑銘は酒井抱一（二七六一—一八二九）によるもので文化十一年五月に書かれた。このとき観阿は五十三歳である。この墓碑には、観阿が嘉永元年に没してのち南面に和氣行蔵による文面が追加された（付録2）。

観阿の生年は明和二年（一七六五）で姓は吉村氏である。観阿の父は当初、吉村と名乗ったが、当時、仙台藩五代藩主伊達吉村（二六八〇—一七五二）と同名であつたため、それを憚り芳村に改めた。

観阿は号を物外、指月斎、聴笙という。姓は芳村氏で、はじめは明昭といい、俗称は太郎兵衛であった。観阿の家は多数の道具を所蔵していたが、寛政十年（一七九八）、三十四歳のときに隠遁の生活を送るようになり、出家し所有した器物を知友に与えた。なお鵬斎の碑文によると、このとき懐妊していた妻がいたが別れ、その子供を遺して出家したとある。観阿は重源による勧進状一冊は手元においていたが、その後、東大寺公般上人の聴くところとなる。観阿は六世前の先祖が和州すなわち奈良の出身であることから、同地に墓所を求め、重源の勧進状を東大寺に寄進して、その見返りとして墓所を得たことがわかる。

次に弘福寺の観阿夫婦の墓碑（付録3）には、観阿は江戸の芝で生まれたとある。前半の記述は、寿蔵の文面の内容と同一である。ただ姓は芳村ではなく吉村となっている。この碑文では観阿の妻である観勢（田鶴）についても触れられている。観阿は観勢とともに葛飾牛島弘福寺の鶴峰禅師を仏法の師としていた。文化十二年（一八一五）に寺中の千体仏が破壊したため観阿に諮って莊嚴を修理し、さらに三十年後の弘化二年（一八四五）に再び修理を行っている<sup>15</sup>。観阿は死期を近くして旧師の因により堯隣真徳に乞い、自身の遺骨を納める墓所を弘福寺とした<sup>16</sup>。

以上の碑文の記述を起点として、さらに観阿の行状をみていきたい。なお観阿に関して本稿で判明した行状については本論文末の表

1を参照されたい。

（1）寺院への寄進

寛政十年（一七九八）、観阿は三十四歳のとき剃髪し、浅草に白醉庵を結んでいる。当時の吉村家の事情については明らかにされていないが、「白醉庵数寄ものかたり」にある次の記述に注目したい。

芳村観阿白醉庵と号し江戸の人にて家富み某侯の用達をも為しけるが破産の危に瀕するや剃髪此世の俗を避け浅草俵町に幽居し畢竟はんぬ<sup>17</sup>

観阿の家は某侯の用達とあることから富商であり、多くの書画類を所蔵したようである。経営上の問題から破産の危機に瀕した観阿は出家したと記されている。寿蔵の碑文中でも述べられているとおり妻子を棄てて出家した背景には、家業が立ち行かなくなったためであることがわかる。

その後、観阿は俵町に幽居したとされる。文政十一年（一八二八）に出版された『分間江戸大絵図』をみても俵町の記載はないため、この俵町とは同じ韻である田原町を意味すると思われる。すなわち観阿が隠棲して白醉庵を営んだ場所とは浅草の田原町であったことがわかる。

観阿は三十四歳のときに前妻とその子を残して出家した。しかし弘福寺の碑文中、後年連れ添ったのは観勢であった。そこで観阿の妻子に注目したい。

妻の観勢については弘福寺の碑文中、次のような記述がある。

妻観勢は浜松の藩士瀧原氏の女にして名を田鶴といふ。貞操怜惻能翁が雅業を佐く。亦翁と共に仏法に帰依して葛飾牛島弘福禅寺の鶴峰禅師を師とす。

記述によれば、観勢は浜松藩士瀧原氏の娘で、名前を田鶴という。「翁が雅業を佐く」とあることから観阿の茶会や鑑定、取次ぎなどを内で支えた人物であったようである。また観阿夫婦は仏法に深く帰依したようで、弘福禅寺の鶴峰禅師を仏法の師とした。

その後の観阿の行状として弘福寺の碑文には次のような記述がある。

ひととせ寺中に<sup>(一)</sup>□所の千体仏破壊し、纔に仕が一の残れるを禅師の憂給ふをききて、翁にはかりて其莊嚴を新にす。後三十年の星霜を経て又損失したりしを、弘化二乙巳のとし再び修理を加へ潤色古に復す。

記述によると観阿は文化十二年に弘福寺にあった千体仏の一つを安置する莊嚴の寄進を行い、さらに三十年後の弘化二年には再び改修の寄進を行なっていることがわかる。

勸学院の寿蔵碑文によると観阿の六世前の祖先が奈良の出身であったとされる。そのため、観阿は文化十四年（一八一七）、五十三歳のとき自身が所持していた俊乗房重源による勸進状をこの年に東大寺に寄進している。

この勸進状とは「法華勸進状」（図1）であり、現在、東大寺が所蔵する。東大寺は平安時代末期に平重衡（一一五七—一一八五）による南都焼き討ちにより罹災したため、重源は東大寺再建のための大勸進に任ぜられる。そのとき重源により寺社造営のための勸進を行なう旨の勸進状が書かれた。観阿が寄進した「法華勸進状」とは、元久二年（一一〇五）十二月、東大寺東塔の完成後は童を配して法華経を千部、転読させたい旨を認めたものである。

「法華勸進状」の奥書（図2）には観阿による墨書がある。<sup>(18)</sup>

重源上人再所勸進東大寺法華会之真迹一卷珍蔵于予書齋中既多歳矣 今兹某月参礼当所而愈随喜上人济度之功業即以此卷奉寄進焉且和州者予家所出之邦也 仰冀憑是勝縁与祖先考妣将成佛果菩提也 因恭記喜捨之信趣矣

文化十四年丁丑四月六日 武州江戸芳村氏観阿（花押）

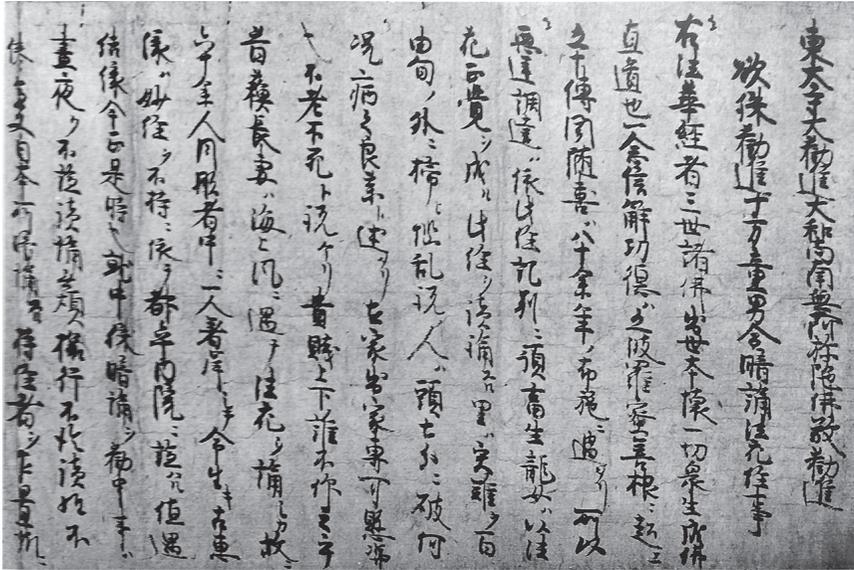


図1 俊乗坊重源筆「法華勸進状」(東大寺蔵)。『国宝・重要文化財大全 第8巻』(文化庁監修、毎日新聞社、1999年)より転載

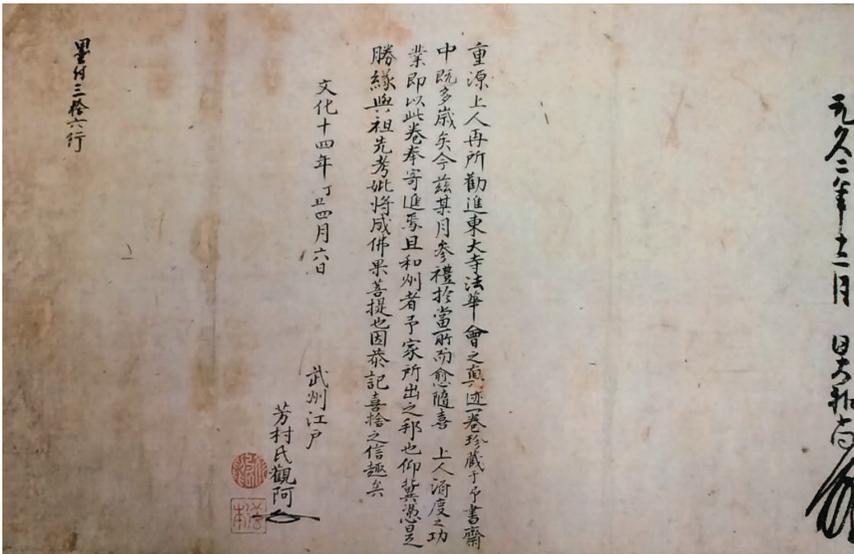


図2 「法華勸進状」(東大寺蔵)の観阿筆奥書。所蔵元による画像提供

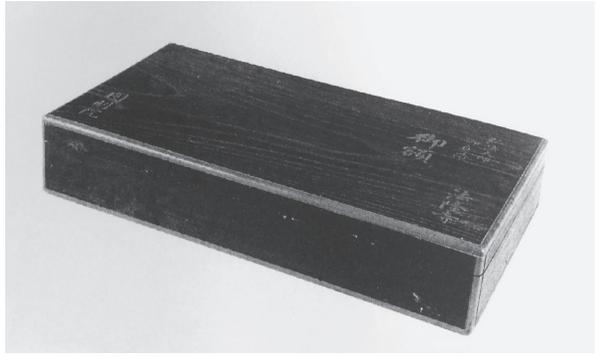


図3 弘法大師額を収納する額箱（法隆寺蔵）。  
『法隆寺の至宝（第14巻）』より転載

（重源上人再所勸進、東大寺法華会の真迹一卷、予が書齋中に珍藏する既に多蔵。今茲某月当所に参礼して愈上人济度の功業を随喜し、即ち此巻を以て寄進し奉り、且つ和州は予が家出づる所の邦なり。仰ぎ冀くは是勝縁に憑り、祖先考妣と將に佛果菩提を成就せんとするなり。因て恭しく喜捨の信趣を記す。

文化十四年丁丑四月六日 武州江戸 芳村氏観阿<sup>19</sup>

観阿はこの一卷を珍藏し、文化十四年四月六日に寄進している。寄

進の理由として、観阿の祖先が奈良の出身であることに加え、亡き父母の菩提を弔うためであるとしている。すなわち、観阿が奈良に自身の寿蔵を建立したのは、先祖の供養のためでもあった。

なお、この勸進状は観阿が文化十四年に東大寺に寄進したのち再び流出し、近代では中村雅真<sup>20</sup>、正格が所持していたが、昭和十二年に再び東大寺に所蔵されることとなる。

このほか観阿と寺院の寄進に着目したところ、法隆寺にも観阿による箱書をもつ額箱（図3）があった。この額箱についてはすでに一九八一年に始まった昭和資材帳調査により明らかにされているが、箱裏および箱底の漆書にある人物名の各一文字が判読されていないため、それぞれの人物について不詳であった<sup>21</sup>。今回、法隆寺の協力のもと資料の提供を受けたため、その判読を試み、観阿との関係のみてみたい。

改めて額箱をみると黒漆の搔合塗の箱で、箱を面取りして朱漆を施した爪紅となっており、箱甲には次のよう朱漆書がある。

弘法大師 法隆寺

御真蹟

御額

円明院

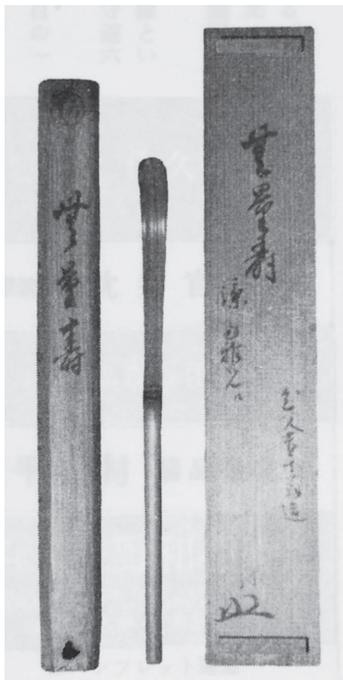


図4 川瀬無窮亭旧蔵の観阿作共筒茶杓「無量寿」および箱墨書

この額箱に収められているのは弘法大師筆の額であり、法隆寺の円明院が所蔵していたことがわかる。  
この額箱の蓋裏には朱漆書で次のように書かれていた。なお今回新たに判明した二文字は□で囲っている。

天保壬寅秋造此額箱以寄附

東都

白酔庵

吉村観阿（花押）

同 観勢女

同 信軸（花押）

漆工 貞次

額箱は天保十三年（一八四二）、観阿が七十八歳のとき、箱を法隆寺円明院に寄進したものである。<sup>(22)</sup>ところで天保十三年、法隆寺は江戸両国の回向院において出開張をしている。江戸での出開張は元禄七年と天保十三年に同所で開催している。<sup>(23)</sup>観阿による額箱の寄進は、出開張を契機になされたものであつたと考えられる。

朱漆書をみてみると観阿と信軸の花押部分のみが自署である。署名に芳村ではなく吉村としており、この頃の観阿は吉村に改めていたことがわかる。

観阿の署名の隣には妻である観勢の名前が確認できる。さらに信軸の名前と花押、箱を作成した漆工の貞次の名前も確認できる。箱底裏には朱漆書で次のような自署がある。

苦楽翁

七十八歳（花押）

片店 弥山（花押）

弥山とする人物の花押は、蓋裏の信軸の花押と同一である。そこで、これと同じ花押をもつ箱墨書きに注目したい。川瀬無窮亭の旧蔵品である観阿作共筒茶杓銘「無量寿」（図4）<sup>(24)</sup>を収納する箱である。墨書には、

無量寿 潦齋主雅兄へ 老父苦楽翁造 弥（花押）

とあり、潦齋主雅兄の求めに応じて書かれ、茶杓が老父の作であると認めている。すなわちこの墨書は観阿の息子によるものであり、同じ花押の持ち主である弥山（信軸）は観阿の息子であったことが判明する。弥山（信軸）が父の作った茶杓に箱書をしている点から、同人も江戸における茶の湯文化に関わった人物であったと考えられる。

ところで、中井浩水は、東大寺四月堂には観阿の位牌が安置され、その位牌には、

嘉永元戊申 六月十九日 施主江戸浅草田原町吉村庸之丞

の記述があると報告している。<sup>(25)</sup> 先述の「白醉庵数寄ものかたり」には観阿は隠居後、田原町に幽居したとあるが、この屋敷は観阿が浅草に結んだ白醉庵であった。位牌にある吉村庸之丞とは白醉庵を住居としていた弥山（信軸）であったと推測される。

観阿の妻は観勢であることは知られていたが、息子は弥山（信軸）であったことが判明した。

(2) 不昧との交流

高橋梅園は、観阿が松平不昧に取り次いだ道具について『大崎様御道具代御手控帳』を引用して次のように述べている。

彼が公のために提供したるもの、松柴の屏風、古銅鉢、篷雪の額、象眼床几を始め、裂類の数々、多葉粉入、緒じめ、根付、刀剣の鐔、柄木、其他文房箱の珍品奇什殆ど枚挙に遑あらず<sup>(26)</sup>

観阿が不昧に多くの道具を取り次いでいる一方、茶の湯道具が少ないことがわかる。不昧の茶の湯道具入手は江戸、京都、大阪の主要な道具商が取り次いでいたが、観阿も不昧のコレクション形成に関係していた。

文化元年（一八〇四）十月二十七日、不昧は江戸大崎屋敷の谷園において谷園中大茶湯を行なっている。この茶会では不昧が無心斎一席を受け持ち、そのほかの茶席を知友が担当した。招かれた人数はおよそ三十名であった。そのうち利休堂の茶席を観阿が担当している。<sup>(28)</sup> 谷園の利休堂とは二階建の堂で、二階には利休像を祀る子堂があり、一階に茶席があった。<sup>(29)</sup> 茶会記によれば、茶席で使用された当日の道具組は次のようになる。

西行歌 世をいとふことこそ 利休好白紙張文庫二一閑硯箱

芦屋の釜 不識大水指 蓋の上に染付蓋置 柄杓 時代蒔絵束

錐兵器 権兵衛茶碗二碗 紹智茶杓 根来香合 砂張翻

菓子 煮染黄飯趣向餅 柚味噌<sup>20)</sup>

水指は「不識大」とあり不識の大壺である。蓋の上に染付蓋置と柄杓が飾られた。おそらく千家流にみられる大壺の点前で、蓋は通常の盆蓋もしくは山道盆などが用いられ、蓋置と柄杓は入飾りにして飾られたものと推測される。

菓子は煮染黄飯趣向餅、柚味噌が振る舞われている。これらは別々に出されたとは考えにくい。趣向餅は珠光餅とも読める。珠光餅とはついた餅に味付けした白味噌を掛けたものである。観阿の茶席では梶などで染めた黄色い飯を餅にして、柚味噌を掛けたものが振る舞われたと考えられる。観阿は三十四歳のときに、家蔵の書画類を知友に分け与えたとされるが、この茶会記から観阿が四十歳時点でもかなりの道具を所蔵していたことが判明する。

ところで畠山記念館が所蔵する「織部切落手鉢」の箱書には、

文化辰年夏求之白醉庵（花押）

とあり、<sup>21)</sup>このとき観阿は四十四歳である。観阿は出家後も、新たに道具を入手していることがわかる。

(3) 翠濤との交流

不昧は文政元年（一八一八）に没している。不昧没後の観阿は高橋箒庵が指摘するように溝口家に入りしていた。<sup>22)</sup>従来の研究では、どのような経緯で溝口家と交渉を持ったかについて明確な史料は確認できていない。

ここでは不昧没後の観阿が翠濤と関わる経緯を溝口家史料からみていくこととする。溝口家史料とは、現在、東京大学史料編纂所が所蔵する史料で、十二代藩主溝口直正（一八五五―一九一九）の子である伯爵溝口直亮（一八七八―一九五二）により寄贈された同家代々の史料である。そのうち翠濤の茶の湯に関する文献や翠濤自身の文書も含まれる。ここでは溝口家史料のうち、翠濤が晩年までを過ごした新発田藩中屋敷幽清館における雑記である『幽清館雑記』に注目する。<sup>23)</sup>この雑記は雑記十二巻（ただし第九巻は欠）と『千貫樹記』、『小浦浪記』からなる。これらの筆跡をみると翠濤自身の筆記または近習の家臣による筆録である。以下、『幽清館雑記』に登場する観阿に関する記述を中心に、観阿と翠濤の交流を明らかにしていく。以下とくに断りのない限り、引用は同書からで本文中に巻数のみ記す。

①五十六歳 文政三年

観阿と翠濤の交渉が始まったのは文政三年の頃である。

文政三庚辰年より道具を屋敷へ出し同四年辛巳年より屋敷へ出入となる（巻十二）

「道具を屋敷へ出し」とあることから、観阿が溝口家に對し道具を売却していたことがわかる。そのため翌年の文政四年より溝口家への出入りを許されることとなる。

成立年は不明であるが、翠濤が戯画として知友の肖像を描き集めた『戯画肖像並略伝』（東京大学史料編纂所蔵<sup>24</sup>）には観阿に関する略伝が載せられており、次のような記述がある。

予か上邸へ翁を初て招きけるハ文政四年辛巳なり。時に予二十二歳翁ハ五十五歳也ける。翁かつて雲州老侯不昧君へ、格別御懇意に召されて名物ども、多く見覚へたるよし。右の厚恩によりて江戸に一人とも云ハるゝ茶器の監定家となりぬ。さきに予か方へ招きて家蔵道具の監定をなさしめしに、これまでさふとも思ハさりし品のうち、名物とも多く見出したる功少からず。

観阿が溝口家に初めて招かれたのは文政四年であり、その交渉も溝口家が所蔵する道具の鑑定であったことがわかる。当時の江戸で、観阿は不昧に知遇され多くの名物道具を覚えていたこともあり、茶

器の鑑定家として著名であったようである。記述中、「さきに予か方へ招きて」とあるのでこれは先述の文政三年の出来事と考えられる。その後、観阿は翠濤の信任を得ていくこととなるが、大きな契機となったのは、溝口家の所蔵した道具のうち名物として古来より著名な作品が多くあることが観阿の鑑定によつて判明したことにある。

文政年間の観阿の行状について「白酔庵数寄ものかたり」には以下のような記述がある。

茲に掲ぐる者は文政七八年の頃に方り彼が専ら数寄道具の鑑定を勉めける雑話にして多くは諸大名と交際の間其物語れる摘要なりと推知すべし<sup>25</sup>

文政の七、八年ごろ、すなわち観阿が六十歳ごろ数寄道具の鑑定が著名であり、諸大名が観阿のもとを訪ねたとある。このことから当時の観阿は数寄道具の鑑定や取次ぎなどを生業にしていたことがわかり、美術商としての一面を持っていたことが推察される。

②六十一歳 文政八年

この頃の観阿と、寿蔵墓碑を書き絵師でもあつた酒井抱一の関係についても触れておきたい。酒井抱一は随筆『句藻』で次のような

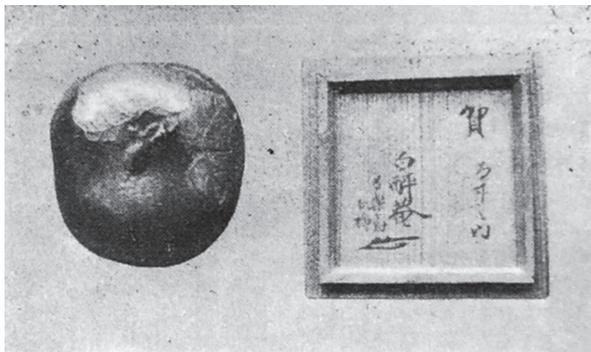


図5 瓢茶器。『知音』第50号(1954)より転載

記事を紹介している。

今年七月十三日洛の法雲院より烏丸光廣卿の御像を蘭畹先生に  
 たのみうつしもとめて遠忌の心なす。了伴、観阿、担齋など来  
 り侍るつる鴨とわきまへかぬる鳥の跡みのりの雲にはらし給へ  
 や<sup>(36)</sup>

文政八年、江戸時代前期の公卿で歌人でもあつた烏丸光廣

(二五七九—一六三八)の法要に関する記事である。法要は江戸にお  
 いて行なわれたようで、参会した人物のうちに古筆の鑑定に携わつ  
 た古筆家十世古筆了伴(一七九〇—一八五三)や観阿、国学者であつ  
 た檜山担齋(一七七四—一八四二)らがあり、当時の江戸での交流  
 がわかる。このとき観阿は六十一歳である。

③六十六歳 文政十三年

観阿が翠濤の茶会に初めて参会したのは文政十三年(一八三〇)  
 のことである。

予か茶会に来るハ文政十五<sup>(37)</sup>庚寅年風炉名残より始めて天保十三  
 壬寅年口切まで十三ヶ年の間に三十三会也右之如く年来茶之  
 道にて懇意之者(卷十二)

記述では文政十五年とあるが、庚寅とあることから文政十三年の  
 風炉名残の茶会であつたと推察できる。その後、観阿は翠濤の茶会  
 にしばしば招かれたようで、天保十三年の口切茶会まで、十三年間  
 のうちに三十三回の茶会に招かれている。

④七十歳 天保五年

天保五年(一八三四)、観阿は古希の祝いとして茶会を催し、記

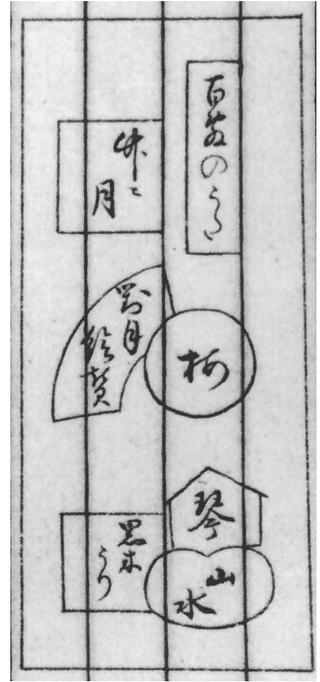


図6 溝口翠濤筆貼交絵。  
『幽清館雜記(卷八)』より転載

念に瓢形の薄茶器を記念に配っている。

茶ありて右賀作の瓢形薄茶器も亦秘藏となすもの也(卷十二)

この茶器は、宮栄二が『知音』第五十号(一九五四年)に紹介し、画像(図5)も掲載されている作品と同定され、箱墨書には「賀百二十之内 白醉庵 苦楽翁 古稀(花押)」とある。宮の解説によると、この茶器の箱蓋裏には「員外五ノ内 観阿」という墨書があるという。<sup>(38)</sup> すなわち百二十個の茶器に五個を加えた総数百二十五個が作成され、知友に配布されていた。<sup>(39)</sup>

⑤七十一歳 天保六年

天保七年(一八三六)正月、観阿は翠濤自筆の絵画作品を贈られている。この絵については天保六年八月二十八日に記載がある(図

6)。この作品は一枚漉きの藤紙に薄墨でくまぬきをし、その中に水墨画を描いた作品である。絵はそれぞれ小堀篷雪の百敷の歌、狩野尚信の竹に月、尾形光琳の梅、松花堂昭乗と江月宗玩による対月絵賛、小堀遠州の琴、狩野探幽の山水、英一蝶の黒木壳を意として描いたものであった。

此自筆書画ハ芳村観阿所望ニまかせれる同七西申年正月二十七日表具箱共出来又箱書願ニ付左之通蓋のうらに認れるなり(巻八)

記述から、この作品は観阿の所望に応じて贈ったものであることがわかる。

⑥七十二歳 天保七年

天保七年五月十五日に、観阿は翠濤自筆の絵を贈られている。このほか長府藩十一代藩主毛利元義(四睡庵/一七八五—一八四三)により「苦楽翁行楽図」が描かれた。

苦楽翁行楽図ハ天保七西申年五月十五日立像を自画し翁二見せければ坐像に図して載度旨申ニ付請に任せ更に坐像を画き五月十五日として小引も識しぬ(巻八)



図7 溝口翠濤画「苦楽翁寿像」。  
『戯画肖像並略伝』より転載

翠濤が観阿に苦楽翁すなわち観阿本人を描いた立像をみせたところ、さらに坐像を描くよう要請があつた。翠濤はそれに応じて、その日のうちに坐像を描き讃を加えて与えたのである。

先出の『戯画肖像並略伝』には冒頭に「苦楽翁寿像」(図7)がある。この立像は翠濤によつて描かれたもので、落款部分には「天保七年丙申五月十六日 景山画」とあり、『幽清館雑記』で述べられていた翠濤による観阿立像と同定される。雑記では五月十五日のこととして述べられているので、本図は観阿に見せた翌日に改めて署名落款および印が捺されたものとわかる。この図によつて観阿の風貌を伺うことができ、現在確認できる観阿の肖像として唯一であ

ることからも貴重である。

寿像をみると観阿は剃髪した姿である。十徳のような羽織を羽織っており、細身であるが眼光が鋭い。更紗でできたような風呂敷を持つており、素足である。

この図が同書に付属している理由は、観阿が翠濤へ坐像を描くように求めたため、立像のほうは翠濤が控えとして所持したからと考えられる。同書には翠濤による観阿の坐像は所載されていない。

現在、「苦楽翁行楽図」の小引の記録が『幽清館雑記』に残されている。ただし、それは翠濤ではなく、四睡庵すなわち毛利元義によるものである。この絵は観阿が元義に自像を描き小引(讃)を書くことを所望したものである。

これまで観阿に関する行状では、先に紹介した勸学院にある寿藏および墓碑、弘福寺にある墓碑しかなかったため、この小引は観阿七十二歳時点での行状が判明する記述として貴重である。なお読み下しは高橋忠彦氏の教示による。

苦も楽も同じかこひのうちに入  
れてうき世なりすめるの(渦)

を見るかな

苦楽翁行楽図小引

翁名観阿氏吉村江戸人 精茶道其家多蓄名書古画珍器奇物以好事而鳴于都下 然而自少既有離世帰真之念 壯年遂削髮出家而不反 結団蕉郭北浅草而居 命曰白醉菴 於是清高之名彌著雅尚之交益衆矣 予亦相善者有年焉 嘗称之以苦楽翁 取乎其菴中扁額不昧源公所書楽中苦中楽之語也 翁即以爲別号 頃者又請予写其肖像 予以拙辞不許 乃作此図併述小引以伝之実天保七年丙甲翁時七十有二云(卷十二)

(翁、名は観阿、氏は吉村、江戸の人なり。茶道に精しく、其の家は、多く名書古画、珍器奇物を蓄え、好事を以て都下に鳴る。然れども少きより既に離世帰真の念有り。

壯年に遂に削髮出家して反らず。団蕉を郭北の浅草に結びて居る。命けて白醉菴と曰う。是において清高の名弥いよいよ著れ、雅尚の交益ましま衆し。予もまた相い善くすること有年なり。嘗てこれに称するに苦楽翁を以てす。其の菴中の扁額へんがくの、不昧源公の書す所の、「楽中苦中苦中楽」の語より取るなり。翁即ち以つて別号と為す。頃者、また予にその肖像を写すを請う。予は拙きを以て辞するも許さず。乃ち此図を作り、併びに小引を述べ、以て之を伝う。実に天保七年丙甲、翁時に七十有二としか云う。)

翠濤画の「苦楽翁行楽図」の写しを描くよう請われたことが述べられている。碑文でも翠濤をはじめとするその他の貴人が観阿のもとに集ったとされるが、元義も浅草白醉庵に集ったその一人であったとがわかる。

⑦七十五歳 天保十年

先述の「苦楽翁行楽図」の小引でも述べられているように、観阿はすでに浅草で白醉庵の庵を結んで多くの人物と交流していた。しかし、翠濤が白醉庵に初めて訪れたのは、天保十年(二八三九)すなわち観阿七十五歳の春であった。このとき床の間に飾つてあった香炉こそ、冒頭にも触れた、後に高橋箒庵所蔵となる「御本兔耳香炉」である。この香炉は箒庵家の売立目録である『一木庵高橋家所蔵品入札』<sup>④</sup>に所載される。箱書には以下のような墨書があつたとされる。

翠濤尊君草廬に初めて御入りの節、床に飾り置き候を御所望にて進献す

天保十年亥中春七十五翁白醉庵観阿<sup>⑫</sup>

墨書から香炉を翠濤が所望し、観阿は献じたことがわかる。箒庵著『東都茶会記』にも、この香炉の箱墨書についての記述が



図8 観阿作共筒茶杓銘「寿」(個人蔵)

ある。箒庵は明治三十五年(一九〇三)頃に溝口家との直接取引により、六十点の道具を入手しているが、この香炉もそのうちのひとつであると考えられる。

⑧七十九歳 天保十四年

天保十四年(二八四三)の元旦、観阿は自作の茶杓に「寿」(図8)という銘を墨書している。この茶杓は現在、個人が所蔵している。

茶杓は中節で、腰はやや高くなっている。総体に細身である。權先はやや角度がついて撓められている。筒は竹皮をすべて削いだ真筒である。共箱で甲には「自作茶杓 白酔庵」とある。筒正面とその側面には以下のような墨書がある。

寿 白酔庵八十翁(花押)

天保癸卯試筆

墨書から天保十四年に作成した自作の茶杓で、筒墨書を試筆(書初め)としたものである。この茶杓は観阿八十賀に際しての初の自作による道具であった。

天保十四年の十月ごろから、翌年に開催する八十賀の茶会にむけて翠濤と観阿の間で往来があった。

同年癸卯年十月五日苦楽翁入来之節来年は八十歳之賀の茶催しありとて此短冊持参上る(卷十二)

観阿は翠濤のもとを訪ね、翌年の自身の八十賀茶会のため「幾千代もなお幾千世も八十八たゞ東方朔の数とりのとし」という一首を詠じた短冊を献上している。

同年末にも観阿は翠濤のもとを訪ねている。

天保十四癸卯十二月二十日松花堂を以志向福祿寿を画き吉村観阿へ贈る是ハ甲辰年八十賀之茶事催しあるニ付三筆願之旨こふによつて画く品也右賛宗中子書

色替ぬまつと竹とのすえのよお

いつれ久しと君のみぞ見む

鶴亀は晴川院加筆也右表具箱共出来とて天保十五甲辰年正月十四日持参なり外題箱書とも同十九日迄二皆成箱表書隸の体なり

繪賛 福祿寿 翠濤画

鶴亀 会心画

古人歌 宗中書(巻八)

天保十四年十二月二十日、翠濤が松花堂昭乗を意とした福祿寿を描き観阿へ贈ったとある。これは翌年に八十賀の茶会を催すにあたり、観阿が翠濤を含めた三人に合作を願ったものである。この三人とは翠濤と狩野養信(晴川院、会心斎/一七九六一一八四六)、小堀宗中(正優/一七八六一一八六七)である。翠濤は福祿寿、養信(会心)は鶴亀を描き、宗中は古人の歌を用いて「色替ぬまつと竹とのすえのよおいつれ久しと君のみぞ見む」という賛をしている。

この合作は早々に表具され、同年正月十四日に観阿のもとに届けられたことがわかる。三人の箱書が揃ったのは同月十九日であった。箱書には翠濤による箱墨書の文面の控えが記録されている。

天保甲辰の春白酔菴観阿苦楽翁八十賀あり 祝意之三筆一幅を予ニ請其需に応し松花堂図を以福祿寿を画 晴川院法印鶴亀を

加筆 賛ハ小堀宗中子即是を贈る速に裝潢して匣に入又外題匣書共三筆を請ふにより其由来をしるす(巻八)

記述から合作者三人の箱書きがなされていたことがわかる。

⑨八十歳 天保十五年

天保十五年、観阿は八十賀を迎え茶会を開催する。

同十五甲辰年十(正)月七日年賀之茶会に参りたる節一閑張細棗桃之絵更山造る苦楽翁の好ミのよし百二十五之内一ツ上る箱書も翁之書にて候此狂歌をしるせりものより歌よみにあらず作の巧拙を論せず二品ともに秘蔵となす(巻十二)

観阿の八十賀茶会の当日には参会した翠濤に「一閑張桃之絵細棗」(図9)が配られたことがわかる。甲部には朱金で桃の蒔絵が施される。桃の図柄に注目すると半分は朱、半分は金である。葉は三枚、茎は一本、花は一輪蒔絵される。葉の三枚は青漆で、葉脈が金蒔絵される。茎の一本は金蒔絵で、荒めの砂子が撒か<sup>ま</sup>れている。花の一輪は銀蒔絵される。蓋裏には朱漆で観阿による「観」と花押がみられる。身底部分には羊遊斎による彫銘で「羊」とある。棗の意匠は桃で、箱側面には、前年末に翠濤に献上した短冊と同じ歌が



図 9-1 原羊遊斎作  
「一閑張桃之絵細甗」(個人蔵)



図 9-2 箱書き

墨書されている。桃は千年の長寿を表し、年の意味は千代である。また後述するように八十賀茶会では本席（濃茶席）の掛物は「千代の歌」を当日用いている点から、この甗の桃の意匠は千代を意図したものであったと考えられる。つまり桃の絵は、千代をキーワードに、千年の弥栄<sup>いよさか</sup>を言祝ぐ意匠として使用されたと考えられる。

⑩八十一歳 弘化二年

その後も観阿と翠濤の交流は続いたが、観阿八十一歳、弘化二年（二八四五）五月二十五日が、観阿が翠濤のもとを訪れた最後となった。

弘化二年乙巳年五月二十五日ニ入来ハ其納となる時に八十一歳二十五ヶ年之間也（卷十二）

このころの観阿について先出の『戯画肖像並略伝』をみると、弘化二年以降は老病のため病床に臥せっていたことがわかる。

予か邸へ出入したるハ弘化二年迄中間二十四年にして其後老病ニより駕籠ニても来ることかなハすなりにける

⑪八十四歳 嘉永元年

観阿は嘉永元年（一八四八）八十四歳で没している。

苦楽翁老病にて嘉永元戊申年六月十九日没時に八十四歳釈迦ねはんの図の如く病床ニ如睡終れり同月八日書納め残し置とる候木団扇両面ニ夢楽の字を書存生中田鶴へ所望いたし貫置也前々記 戊申六月二十日記（卷十二）

釈迦の涅槃図のように病床にあつて眠るように静かに息を引きとつたようである。

観阿は没する十一日前の六月八日、遺墨として団扇の両面に「夢」  
「楽」と一文字ずつ書いた。観阿は不昧による「楽中苦 苦中楽」の扁額を自室に掲げ、自身も「苦楽」と号していた。このことを念頭におけば、最後に書き残した夢楽の意味は「楽中夢 夢中楽」であつたと解せられ、観阿の遺稿ともとれる。

その後、没するまでの十日余の間に、翠濤は観阿の妻田鶴に依頼し遺墨を貰い受けたとある。翠濤は観阿が所持した道具を没後に譲渡する約束をしたものの、それらの作品を生存中に貰い受けたようである。溝口家のコレクションと観阿の関わりについては三章で詳細に検討する。

## 二 観阿八十賀の茶会

先述の通り、翠濤は天保十五年一月七日に観阿八十賀の茶会に招かれていた。従来の研究でも観阿の八十賀と原羊遊斎作「一閑張桃之絵細棗」の關係は紹介されているが、八十賀の茶会自体については資料の不足から明らかにされていなかった。今回、新出の資料となる「桑昔竹形茶杓」(図10)とそれに付属する観阿八十賀の茶会記(図11)を個人が所蔵していることを確認したため、茶会の詳細

な様子をを知ることができた。この茶杓はかつて加納藩江戸家老篠原長兵衛(宝劔子)が所蔵していた。茶会記は篠原が観阿の八十賀茶会に招かれたときのもので、その写本となる。また茶杓は後述するように茶会の記念として観阿から長兵衛に贈られた。

八十賀の茶会記が存在することは、当時の茶会の状況を明らかにするとともに、観阿が所持した道具を明らかにする上でも貴重な資料である。

### (一) 桑昔竹形茶杓と付属する茶会記

茶杓の材は桑である。その造りは蟻腰で、節下は一本樋、節上は菓研樋となっている。權先は大らかに削られている。筒は細身の竹で側面中央に皮を少し残している。筒の大きさは茶杓に比較して華奢に作られている。筒裏には観阿による墨書で「甲辰 賀」とあり、筒正面には以下のような記述がある。

#### ④ 桑昔竹形茶杓 八十翁観阿(花押)

十本ノ内

この桑茶杓は天保十五年の観阿八十賀に際して十本作成された茶杓であることがわかる。箱甲には「桑昔竹形茶杓 白醉庵」とあり、箱裏には以下のような記述がある。



図10 桑昔竹形茶杓 (個人蔵)

寿 幾千代もいく千代も八十八たゝ東方朔の数取の歳 八十翁  
観阿 (花押)

記述にある一首は「一閑張桃之絵細棗」の箱に書かれる歌と同一である。すなわち観阿八十賀に際して、これまで知られていた百二十五個の細棗以外にも、十本の桑茶杓が用意されていたことが判明する。

茶杓に付属する茶会記をみると、表題に「観阿和尚賀の茶事／写

書」とあつて、篠原が観阿を和尚と呼んでいたことがわかる。観阿は三十四歳のときに剃髪し、その後は法体であつたため、観阿の周辺の人々は和尚と呼んでいたと考えられる。会記の表題には「観阿八十賀茶席写庚午初冬篠原宝剣子」とある。篠原が招かれた観阿の八十賀の会記であり、この会記は明治三年（一八七〇）初冬に写されたことがわかる。

使用された道具組は以下ようになる。

桑山可斎筆

君か代は千代にや千代に又千代に千代を重ねて千代をよろこ

ぶ

釜 芦屋 水さし 光悦弟 空中 銘宝傘

共箱

香キ はんねら 茶わん 鉢の子手 片手 小堀権

十郎書付 老の友

炭取 相禅組（茶か）きり 茶入 柳棗 袋大門つり

灰キ 長次郎焼ぬき 茶杓 正隠

三羽黒つる遠州所持々書付 こほしわけ

後

花入 しからきう（一）つくまり

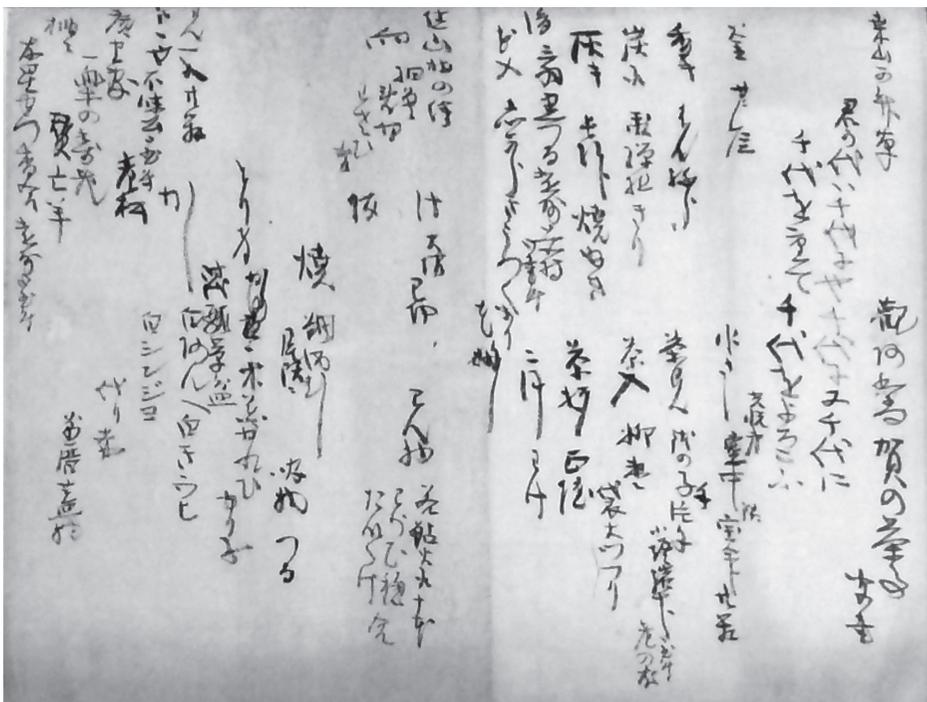


図 11 観阿八十賀茶会記 (個人蔵)

	(籠か)	佳山	梅の絵	汁	大根わ切	わん物	若鮎	火取十本
		向	細そめ切	わさひ有		わらひ穂	松ろたけ	合
		飯	焼	鯛酒むし				
				尾頭ニ	吸物	つる		
				とり身	か	る <small>(ママ)</small> 蓼も木花	かれい	
	(茶籠)	わん	一入共箱時代草盆	ゆり子				
		ト、ヤ	不昧公御書付	老松	かし	白阿 <small>(籠)</small> ん入白キウヒ		
		広座敷			白シンジヨ	代り赤		
	(籠)	一楽の寿老賛亡羊			萬曆蓋物			
	棚ニ							
		存星ゆつ香合	遠州侯書付					

会記に沿って茶会の様子をみてみたい。初座の床の間の掛物には桑山可齋(一六一五—一七〇〇)による「千代の歌」の掛物が掛けられた。釜は芦屋、香合は素焼きの南蛮ハンネラである。炭斗はおそらく宗全作と考えられる組物が用いられ、灰器は樂長次郎作の焼貫、羽は黒鶴の三羽(小堀遠州所持で同人書付)である。

懷石は別席で振る舞われた。床の間には「佳山」(乾山か?)の

梅の絵が掛けられた。焼物には鯛の尾頭付の酒蒸が出され、吸物には鶴の肉を用い、強肴には萬曆年間に焼成された磁器の蓋物を用いて紅白で作られた真薯が呈された。祝意を込めた懐石である。菓子には白餡入白求肥が用いられた。

後座の床の間では掛物が外され信楽焼の蹲の花入が飾られ、梅が一種のみ生けられた。点前座の周辺をみてみると水指は本阿弥空中（光甫／一六〇二—一六八二）による作とあることから、「空中信楽」であつたと考えられる。茶入は柳棗で袋は大門つりとある。この棗については材質が柳の木であつたのか、柳の模様がある棗かは定かではない。ただ観阿に関係した棗のうち、同人の箱墨書のある作品では、「嵯峨柳時絵大棗」（個人蔵）がある。<sup>49</sup>

濃茶に使用された茶碗は高麗堅手鉢子で銘を「老の友」（小堀権十郎書付）という。堅手における鉢子とは、草間直方による『茶器名物図彙』（文彩社、一九七六年）によれば、元来は鉢のみで茶碗はなかつたが、そのうち小さい物を茶碗に転用したもので、数が少ないとされる。古い手の堅手より後に日本にもたらされ、およそ十七世紀頃の作とされる。同書中、鉢子堅手の茶碗は「当世之任人氣に逢ふ故、至て人賞翫す」と述べられ、当時の茶の湯では人気の高い茶碗の一つであつたことがわかる。<sup>50</sup> 茶杓の作者として正隠とあるが、これは藤村庸軒（一六一三—一六九九）のことをさす。建水は木地曲とある。

薄茶席については詳細な記述がないため、濃茶を行ったのと同席であつたと考えられる。主茶碗には楽一入作の茶碗、副茶碗には高麗斗々屋の銘「老松」（松平不昧書付）を用いている。

以上の濃茶および薄茶が催された茶席は、道具組から小間席であつたと判断される。この小間に関して『幽清館雜記』をみてみると次のような記述がある。

吉村観阿 白醉庵 隠宅掛名 楽之斎囲三疊（卷十）

観阿の浅草の居宅白醉庵には、楽之斎という三疊の席があつたとがわかる。観阿が実際に茶会を行なつた小間の茶室は、楽之斎であつたと考えられる。<sup>51</sup> なお茶会後は開きの間を設けて広間の座敷に移つた。広間の床の間には亡羊の賛がある。「一楽筆」の寿老人（福祿寿）の絵が掛けられ、違い棚には小堀遠州（一五七九—一六四七）の書付がある存星柚香合が飾られていたという。<sup>52</sup> 当日、この広間は茶会が終わつてのち、箱書や器物に付属する添状等の閲覧に供された場と考えられる。「一閑張桃之絵細棗」もこの広間で客に配布されたものと考えられる。

（二）狩野山楽画三宅亡羊賛「福祿寿」について

観阿八十賀茶会では、前年に翠濤と宗中、晴川院に所望した合作

を使用せず、一楽画亡羊讚の福祿寿の掛物を使用しているという。ところが、亡羊の活躍する以前の人物で一楽なる人物を特定することはできない。一方、調査の過程で、個人が所蔵する狩野山楽画三宅亡羊賛「福祿寿」を確認した。

本幅は狩野山楽（一五五九―一六三五）が福祿寿の絵を描き、三宅亡羊（寄斎／一五八〇―一六四九）が讚をした「福祿寿」（図12）である。この掛物の巻止には観阿による墨書で、

福祿寿 山楽画

讚亡羊筆 白醉庵

苦楽翁（花押）

とある。また作品を収納する箱墨書にも観阿による墨書で、甲部には、

福祿寿 賛 三宅寄斎筆

山楽画

とあり裏には、

讚 三宅亡羊筆 白醉庵（花押）

とある。このように、この作品には観阿による書付が多く見られ、観阿の所蔵あるいは取次ぎによるものであることは明らかである。

この点から、茶会記にある一楽とは、書写する際の誤写で、正しくは山楽であると考えられ、先述の八十賀茶会で使用された「一楽の寿老」とは狩野山楽画の「福祿寿」と同定される。

福祿寿を描いた狩野山楽とは、狩野永徳（一五四三―一五九〇）の養子となり永徳没後の狩野家を率いた人物で、山楽の養子である狩野山雪（一五九〇―一六五一）とともに狩野派において重要な人物である。その山楽による寿老人の眉毛は非常に長く伸び、右手の小指を立て持っている状態を描く。寿老人は左手に奉書のような紙を一枚持っている。背景には松と梅、前方に鶴と亀を描く。寿老人の傍らには童子がいる。<sup>(33)</sup> 軸先の材は紫檀で、そこに富貴長命と彫られている。梅の花弁のいくつかは金泥が用いられており、松と梅の下部および地面部分も金泥で描かれている。画面右側には「楽」の方印が捺される。<sup>(34)</sup>

亡羊による賛は次のとおりである。<sup>(35)</sup>

徳香応梅 齡松亀鶴 老人依意 童子在側

（徳香は梅に応じ、齡松と亀鶴と。老人は意に依り、童子は側に在り。）

亡羊の讚は徳の秀でた人間を、構図中の樹木や動物で讚える内容



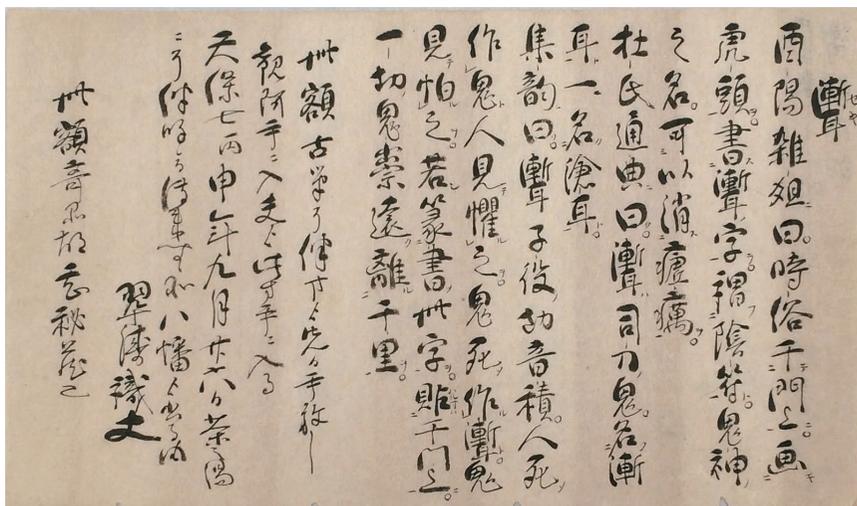


図 13 溝口翠濤による額「壺」の控え（江戸東京博物館蔵）

を通じて具体的な交流関係やその範囲を探ってみたい。そこで観阿の行状のうち、所蔵した道具や他家に所蔵される道具を取り次ぎ売却している点に注目したい。

観阿による道具売却について「白醉庵数寄ものかたり」には、青磁桔梗香合を観阿が五十兩で買取り、金十枚で他所に売却したことや、朽木星橋（綱貞／一七三—一七八八）の所持した蘭亭洗硯の図や李龍眠などを同家が売却した際に、観阿が二十金で買い取ったことなどの記述がみられる。<sup>60)</sup>

先述の通り、観阿が不昧に取り次いだ道具としては、松栄の屏風、古銅鉢、篷雪の額、象眼床几、裂類の数々、多葉粉入、緒じめ、根付、刀劍の鍔、柄木、其他文房箱の珍品奇什などがあつた。<sup>61)</sup> 不昧の没後、観阿は溝口家に入入りしているが、その交渉は文政三年（二八二〇）に行なつた道具の売却がその最初であつた。

すでにみたように、的確な鑑定によつて信頼を得た観阿は、溝口家に入入りを許され、親密な関係を構築していた。そのなかで茶道具や自作品のやりとりをしていた様子も確認できた。これまでの筆者の研究で明らかになつた溝口家旧蔵品のうち、観阿が同家に取り次いだ作品には、大燈国師墨蹟「日山之賦」（個人蔵）がある。<sup>62)</sup> この墨蹟に付属する翠濤添状の包紙には以下のとおり書かれている。

了伴秘蔵之軸天保十五甲辰年七月同人々求之 観阿取次也

この墨蹟はもともと古筆了伴が所持していたが、観阿が取り次ぎ翠濤に譲渡していることが確認できる。

了伴が所蔵した作品を翠濤が入手した例では、石清水八幡宮に伝来した額「響」がある。この額の現存は確認できないが、翠濤による控え（図13）が江戸東京博物館に所蔵されており、次のような記述がある。<sup>63</sup>

此額古筆了伴方々先日手放し観阿手ニ入夫々此方手ニ入る

天保七丙申九月二十六日茶湯ニ了伴呼る伝来す品八幡方出る内

翠濤識（花押）

此額奇品故意秘蔵也

やはり、了伴が所蔵した額を観阿が入手し、翠濤に売却していることがわかる。

先述の大燈国師墨蹟「日山之賦」がはじめて使用された茶会は、弘化二年（一八四五）十一月に開催された「御数寄屋開にて初て御口切御茶会」である。なお、この茶会で使用された井戸脇茶碗について、『幽清館雜記』では以下のような記述がある。

右は元安部様ニ在之其後観阿所持近年御取入井戸脇之内にてハ

珍しき出来物之由（巻五）

この茶碗は岡部藩主安部家にあつたものを、観阿が所持し、その後は翠濤に売却していることがわかる。

このほか、「三不点茶箱」が確認される。

○三不点茶箱 桐木地けんどん蓋表ニ江月筆左之文あり

点茶語云 天不晴則不点湯不老則不点不得其人則不点

喫却了也 転合什物

右茶箱類之内第一之秘蔵宗甫子所持之品也

天保七丙申年九月二十六日観阿手方取入内具ハ予か好にて追々

集む外箱ハ天保十五年寅年十一月八日出来 宗中書ハ同年なり

（巻八）

この茶箱は遠州の所持した茶箱で、遠州の茶室転合庵の什物であつた。茶箱には江月宗玩（一五七四—一六四三）の筆による「三不点」の語があつた。この茶箱は天保七年（一八三六）九月二十六日に、翠濤が観阿から入手していることがわかる。

高橋箒庵が『近世道具移動史』で指摘するように、溝口家の旧蔵品には観阿による箱書が多い。<sup>65</sup> 現存する溝口家旧蔵品では「桑柄桜川巻灰匙」（個人蔵）、「南蛮砂張香箸」（個人蔵）、「高麗堅手盃」（個人蔵）、「祥瑞香浅手茶器」（個人蔵）に観阿の箱墨書がある。<sup>66</sup> このほか現在、個人が所蔵する「祥瑞鳥摘茶器」を収納する箱の覆紙にも、



図 14-3 蓋裏



図 14-1 祥瑞鳥摘茶器 (個人蔵)



図 14-2

溝口家の旧蔵品を示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印を捺した貼紙がある。箱裏には貼紙で「上 芳村」とあり、観阿が翠濤に献上した茶器であったと考えられる(図14<sup>67</sup>)。

売立目録に所載される溝口家旧蔵品のうち、観阿の箱書がある作品は十一件が確認される(論文未表<sup>2</sup>)。このような作品も、観阿が溝口家に取り次いだ作品であったと考えられる。

観阿が溝口家の所蔵品を鑑定した点について、溝口家の茶会に注目したい。それは弘化三年の小堀遠州二百年遠忌に際し、五月に溝口家で開催された御名物点茶会である。<sup>68</sup>このとき茶会で使用されたのは「桐の御釜」である。

道仁作にて有之と先年観阿鑑定申上候(巻五)

武野紹鷗(一五〇二—一五五五)の釜師であった西村道仁(生没年不詳)による釜を観阿が鑑定していることがわかる。

そこで観阿が溝口家に関係した作品を先出の『戯画肖像並略伝』をみてみると次のような記述がある。

翁か許より予か手ニ入たる道具数々あり 其中に最秘蔵するハ石州公自筆茶道教歌之小本也し また雨漏茶碗ハ翁か八十賀之茶会に自これを用ひて茶を予に喫せし品也 其後翁か手より得之予か家に蔵む 又翁か没後にゆつるへき約束の品々存生中にゆつり度由にてのしを付上る内に青貝八仙大硯屏ハまれなる品也

翠濤が観阿より入手した道具が多数あったうち、最も重宝としたのは片桐石州(一六〇五—一六七三)自筆の茶道教歌の小本であつ

たという<sup>69</sup>。また翠濤は観阿が八十賀の茶会で使用したという「雨漏茶碗」も入手したようである。この点から一月七日の翠濤を招いた時および、時期は不明ながら篠原長兵衛を招いたときには濃茶で使用する茶碗を替えていたことがわかる。

この「雨漏茶碗」について溝口家の茶道具の蔵帳である『新発田御道具帳』中、「茶碗之部」をみてみると、「高麗雨漏茶碗」、「見明院様御道具 雨漏手茶碗 銘さざれ石 内石州公外箱宗中」、「見廟御秘蔵 粉吹雨漏手茶碗 銘一文字」の記述がある。以上の三点のうちいずれかと考えられる。

また、翠濤は観阿が所持した道具を没後に譲渡する約束をしたものの、それらの作品を生存中に貰い受けたようで、このとき観阿は道具類に熨斗をつけて送ってきたと述べられている。ここに挙げられた「青貝八仙大硯屏」は、観阿が晩年まで所持したコレクションの一つであることがわかる。

以上のことから観阿は溝口家のほかの器物の鑑定に関与していたと考えられる。その後も同家旧蔵品の鑑定や道具の取次ぎにより多くの道具が溝口家に売却されていた。このようなことから観阿の所持品も含めた作品を溝口家が入手したため、同家は優れたコレクションを形成することができた<sup>71</sup>。

#### 四 むすび

観阿の行状については、これまで不昧や翠濤の交流の一端が指摘されるも、その実態は明らかでなかった。今回の調査により観阿が不昧のもとに出入りしていたときの茶会記、および東京大学史料編纂所が所蔵する溝口家史料から、不昧没後の観阿の行状を明らかにすることができた。

今回の溝口家史料の調査から観阿寿像（立像）が判明した。観阿の容姿については翠濤および元義による二つの「苦楽翁行楽図」があつたとされる。溝口家史料から元義による小引を明らかにし、元義も観阿と交流のあつた人物であることが判明した。また観阿と翠濤との交流では茶会への往来のほか、観阿が翠濤に画を所望するなどの交流がみられた。

従来の研究でも重源による「法華勧進状」を東大寺へ寄進していることや、墓碑銘から弘福寺の千体仏一体を安置する莊嚴の補修を二度行っているなど信仰深い一面が知られていた。今回の調査により、法隆寺にも額箱を寄進していたことが判明した。また法隆寺に寄進した額箱の漆書から観阿には妻観勢のほか息子信軸がいたことを確認した。この信軸という人物は、別号として弥山を名乗っていたことも判明した。

観阿八十賀に際しては正月から複数回にわたり茶会を開催しており、翠濤は正月七日に招かれていた。このとき翠濤は記念に羊遊斎作「一閑張桃之絵細棗」を貰っている点から、茶会の記念としての細棗が配られたことがわかる。棗を収納する箱側面には、前年十月五日に翠濤に献上した短冊の歌が書かれていた。今回の調査では観阿による八十賀の茶会記を確認し、先述の棗のほか十人には桑昔竹形茶杓が配られていたことが判明した。またこの茶会の広間席で使用された狩野山楽画三宅亡羊賛「福祿寿」が現存することを確認した。

溝口家の記録から、同家の所蔵した作品のうち観阿の取次ぎが確認される作品は古筆了伴が所持した大燈国師墨蹟「日山之賦」、額字「霽」、安部家が所持した井戸脇茶碗、観阿自身も所持した小堀遠州所持の三不点茶箱の四件であった。このほか売立目録から観阿の箱書がある溝口家伝来品は十一件確認できる。観阿による取次ぎおよび譲渡が、翠濤のコレクション形成とその質の向上において大きく寄与した。

このような美術品売買や鑑定などの活動は観阿の生業となっていた。観阿自身が、美術品を供給する側にあつて、質の高い美術品を選択することができた。また諸家への出入りを可能としたのは、青年期の不昧との交流、後年は翠濤との交流などとともに酒井抱一、古筆了伴、西村藐庵などの江戸における画家、鑑定家、美術品蒐集

家等との交流によるネットワークと、作品を見極める優れた眼力を養ってきた点にある。

観阿による取次ぎで道具を売却する活動は溝口家に限らず他家でもあつたと推測され、観阿の経済活動とみた場合、その財力が背景にあつたと考えられる。

謝辞…本稿執筆にあたり調査にご協力いただきました東大寺、法隆寺、福岡市美術館、東大寺図書館、東京大学史料編纂所、江戸東京博物館、東京文化財研究所、同志社大学ラーネッド記念図書館、上野道善師、個人の御所蔵家の皆様、漢文の読み下しのご教示を賜りました東京学芸大学教授高橋忠彦氏に深謝申し上げます。

付記…売立目録の調査は宮武慶之（研究代表者、財津永次「売立目録所載の墨蹟データベース構築による筆跡の検討」（平成二十六年度出光文化福祉財団研究助成）による。

注

(1) 「江戸後期の茶人。名は明昭、号は物外・聴笙・指月斎・苦楽庵、通称を丸屋善右衛門・太郎兵衛。多数蔵した書画骨董を人に与えて、剃髪して浅草に庵を結んだ。鑑識に長じ、松平不昧の名器収集にも力を貸した」（『原色茶道大辞典』淡交社、一九七五年）。

(2) 観阿の父にあたる人物は宗徧流の門人で松沢宗見に師事して、陸庵、晩入軒、隠正と号した人物であつたとされる。千宗左監修『茶道の源流（第六卷）』淡交社、一九八三年、一九五頁。

- (3) 高橋梅園『茶禪不昧公』宝雲舎、一九四四年、二二二頁。
- (4) 忘我逸人「白酔庵数寄ものかたり」『名家談叢』一四号、一八九六年、四八―五一頁。および忘我逸人「白酔庵数寄物語芳村観阿を云ふ」『名家談叢』一六号、一八九六年、四八―五三頁。
- (5) 高橋箒庵『東都茶会記(第三輯下)』箒文社、一九一六年、一七一―一九頁。
- (6) 高橋義雄『近世道具移動史』慶文堂、一九三〇年、一四八―一五〇頁。そのほか、同書には観阿と翠瀾の関係について次のような記述がある。「瀾の家は越後新発田藩主で、文政頃号を翠瀾と云はれた好事の主人あり、彼の観阿白酔庵を寵遇し茶事に執心にして盛んに名器を買収せられたので、各般の什器が潤沢であつた。」
- (7) 相見香雨「白酔葦芳村観阿」、中野三敏、菊竹淳一共編『相見香雨集(四)』青裳堂書店、一九九六年、二八八―三〇一頁。
- (8) この内容は前掲注(4)の忘我逸人による「白酔庵数寄ものかたり」および、その続編である「白酔庵数寄物語芳村観阿を云ふ」の内容と同一であり、抄録本と考えられる。
- (9) 中井浩水「白酔庵観阿」『陶説』第四二号、日本陶磁器協会、一九五六年、三〇―三三頁。
- (10) 満岡忠成「白酔庵観阿(上)」『茶道雑誌』六月号、一九六五年、一九―二四頁。および満岡忠成「白酔庵観阿(下)」『茶道雑誌』七月号、一九六五年、一八―二二頁。
- (11) 邑木千以「芳村観阿作赤染茶碗銘若草」『茶道雑誌』十一月号、一九七一年、一〇三―一〇六頁。
- (12) 郷家忠臣「評伝原羊遊齋」五島美術館編『羊遊齋江戸琳派の蒔絵師』五島美術館、一九九九年、一四四―一四五頁。
- (13) 前掲注(8) 相見香雨「白酔葦芳村観阿」、二九〇頁。
- (14) 宮栄二「溝口翠瀾と観阿のことなど」『知音』第五〇号、一九五四年、八一―一頁。なお宮は同書において竹花入銘「時雨」(八十翁)、竹水指(八十一翁)、自作赤黒茶碗「隠(陰力)陽」(七十五翁)、観阿好一閑張細棗桃ノ絵(八十翁)、自作赤香合鈴形(七十三翁)、観阿好薄茶器瓢(七十翁)、自作茶杓銘「陰陽(達磨・維摩)」(七十翁観阿)、一角茶杓銘「八仙張果老」(七十四翁)、竹蓋置二個(八十翁)を紹介している。
- (15) 弘福寺の概観について、文化文政期に編纂された『新編武蔵国風土記稿』をみると、境内に千体仏があつたとの記述は確認できない。
- (16) 關根只誠『名人忌辰録』(六合館、一九二五年)で観阿の項をみると以下のような記述がある。「吉村観阿 物外 芝丸屋町に住す 通称丸屋善右衛門剃髪して白酔庵観阿号苦楽庵 嘉永元年申年六月十九日歿す 西本願寺福原寺に葬る」(二八頁)。
- 記述から観阿は芝丸屋町の住人であつたとされ、藐庵の碑文の記述にある芝の生まれと合致する。通称を丸屋善右衛門としているが、碑文中の太郎兵衛名が適当で、善衛門とあるが詳細は不詳。剃髪してとあるが、これは鵬斎の碑文によると三十四歳のときに遁世して出家したことをさす。
- (17) 前掲注(4) 忘我逸人「白酔庵数寄ものかたり」、四八―四九頁。
- (18) 前掲注(7) 中井浩水「白酔庵観阿」、三二頁、および奈良市編『奈良市史(書跡篇)』吉川弘文館、一九七三年、二二七―一三〇頁。これらでは奥書の観阿の墨書について紹介されているが、図版で紹介するのは本稿が初めてである。
- (19) 高橋箒庵『東都茶会記(第五輯上)』箒文社、一九一八年、一二九頁。
- (20) 高橋箒庵は、大正六年五月四日に奈良の中村雅真宅を訪れた際、この勸進状を拜見しており、巻末にある観阿の記文を紹介している。前掲注(19) 高橋箒庵『東都茶会記(第五輯上)』、一二三―一三〇頁。
- (21) 法隆寺昭和資財帳編集委員会編『法隆寺の至宝 昭和資財帳(第十四巻)』小学館、一九九九年、四一頁。同書に図版(27黒漆塗箱天保十三年)が所載される。また箱書きは次のように記載されている(同一八九頁)。

【箱蓋表】

法隆寺／弘法大師／御真蹟／御額／円明院

【蓋裏】

天保壬寅秋造此額箱以寄附／東都 白酔庵／吉村観阿「花押」／同

観勢女／同 信

□（花押）／漆工貞次

【身外底】

苦楽翁七十八歳「花押」／片店 □山「花押」

(22) 前掲注(4) 忘我逸人「白酔庵数寄物語芳村観阿を云ふ」。同書には他にも法隆寺に關し、蓮時絵経箱を酒井抱一が入手した条(四八頁)、法隆寺から放出された古作杉の釈迦尊像の条(五〇頁)などの記述がみられる。

(23) 樋口秀雄は天保十三年の出開張の意義を、「一般人の法隆寺崇敬もさることながら好古学的関心を呼んだことで大きかった」としている。樋口秀雄「元禄天保法隆寺靈宝の江戸開帳——その経過と意義について」『東京国立博物館研究誌』第九九号、一九五九年、二四—二六頁。

(24) この茶杓は観阿による共筒茶杓で、筒のメ印は阿に丸印を押し、墨書で「無量寿 茶ヒ而喫之人延命也 白酔庵観阿（花押）」とある。

(25) 前掲注(7) 中井浩水「白酔庵観阿」、三二頁。

(26) 前掲注(3) 高橋梅園『茶禪不昧公』、二二〇頁より。原本の所在は不明。ただし高橋梅園「芳村観阿と不昧公」『古美術』第一五七号(宝雲舎、一九四四年)、四〇—四六頁では、松江の旧藩臣田口彌十郎翁の所持していた写本であると述べている。

(27) 『雲州公御蔵帳』には不昧の購入した多数の道具が所載される。不昧に道具を取り次いだ人物には、伏見屋甚右衛門、加賀屋作右衛門、本屋惣吉、竹屋忠兵衛、河内屋宗濟、谷松屋貞八、竹屋喜助、切屋八左衛門、山越利兵衛、墨屋助三郎、谷松屋権兵衛、道具屋道勝らがいる。このほかでは狩野小右衛門や狩野養川院も不昧に道具を取り次いでいる。

(28) 加藤義一郎『不昧公茶会記抄』雅俗山莊、一九四五年、八九—九二頁。

(29) 宮崎幸磨編『茶道宝鑑(初編 中巻)』青山堂、一九二〇年、利休堂の項。

(30) 前掲注(28) 加藤義一郎『不昧公茶会記抄』、九二頁。

(31) 林屋晴三編『日本の陶磁(第四卷)』中央公論社、一九八八年、八九頁。

(32) 前掲注(5) 高橋箒庵『東都茶会記(第三輯下)』、一七頁。

(33) 『幽清館雜記』第一—第十二卷(うち第九卷は欠)、『千貫樹記』、『小浦浪記』よりなる。東京大学資料編纂所蔵、請求記号溝口家史料—325。

(34) 『戲面肖像並略伝』東京大学史料編纂所蔵、請求記号溝口家史料—169。

(35) 前掲注(4) 忘我逸人「白酔庵数寄ものかたり」、四八—四九頁。

(36) 酒井抱一「隣家鶯」『句藻』。玉蟲敏子『都市のなかの絵——酒井抱一の絵事とその遺響』星雲社、二〇〇四年、四九—一頁より再引用。

(37) 前掲注(14) 宮栄二「溝口翠濤と観阿のことなど」、一〇頁。

(38) この茶器について満岡は白酔庵好みの薄茶器として瓢を紹介しており、箱書には以下のような墨書があることを紹介している。「賀 百二十之内 白酔庵苦楽翁古稀(花押)」前掲注(10) 満岡忠成「白酔庵観阿(下)」、一九頁。

(39) 中井は茶器について次のように述べている。「丸形の瓢に鉛と金粉にて夕顔の葉と蔓を描き、内部は黒漆に荒粉、賀百二十五ノ内古稀と箱書」前掲注(7) 中井浩水「白酔庵観阿」、三二頁。

記述の茶器の形状から類推される作品として藤村庸軒好みの回也香合がある。回とは孔子の弟子中、最も優れた弟子であり瓢を愛用した人物・顔回である。観阿が七十賀に際しては、七十七人の弟子すなわち七十子の「七十」と七十歳にちなんで作成したものと考えられる。

(40) 画中の百敷の歌とは、『続後撰集(卷十八、雑下)』にある順徳天皇(一一九七—一二四二)の「百敷や古き軒端のしのぶにもなほあまりある昔なりけり」である。

(41) 売立目録には「七七 御本兔耳香炉 白酔庵所持 溝口家伝来」とある。売立目録『一木庵高橋家所蔵品入札』東京美術倶楽部、一九三〇年。

- (42) 熊倉功夫、原田茂弘校註『東都茶会記』近代茶会史料集成(二)、淡交社、二〇〇〇年、四一〇―四一一頁。同書にはこの香炉の箱墨書についての記述がある。篤庵は明治三十五年頃に溝口家との直接取引により、六十点の道具を入手しているが、この香炉もそのうちの一つであると考えられる。
- (43) 宮武慶之「明治期における溝口家の道具移動史」『人文』第一三三号、学習院大学人文科学研究所、二〇一三年、二二二―二二五頁。
- (44) なお、観阿八十歳のときには先述の川瀬家旧蔵の茶杓一件のほかに、現在、個人が所蔵する観阿筆短冊「老松」がある。この短冊は、檀紙に雲母を引き、切箔を散らし菊の押模様がある。老松と題して次のような歌一首が書かれる。  
年ことに緑をそふる常盤木の松の齡そかきりしられす  
歌意は老松の常緑を祝った内容で、署名に「白醉庵 八十翁 観阿(花押)」とある。
- (45) 大正三年三月二十九日、上野鶯谷国華俱樂部において福祿寿会が開催された。この会は池内就富が七十二歳であったが、古稀祝賀のため、諸家に所蔵される福祿寿の画幅が展示された。溝口伯爵家は次の作品を出品していることがわかる。「同家出品の狩野伊川院が鶴を画き、溝口家の祖先翠濤侯が福祿寿を画き、其上に小堀宗中が色かへぬ松と竹との末の世を何れ久しと君のみを見むの賛を書きたる者は、是れ亦固より小品なれども茶人の喜ぶべき洒落幅なり」(熊倉功夫、原田茂弘校註『東都茶会記(二)』淡交社、一九八九年、二六一―二七頁)。
- 記述から、観阿の所望によって書かれた作品と同一の内容である。その後、溝口家の所蔵品となっている点について、二つの可能性が考えられる。一つは観阿が所望した当日、控えにもう一つ作成され、翠濤自身が所持したものであること。二つは観阿が歿後、妻の観勢が溝口家に返献した作品であることのいずれかであろうである。
- (46) この歌は『拾遺抄(巻第五)』の齋宮内侍による一首である。
- (47) 「加納藩家老。藩主永井尚典・尚服に仕える。篠原家は代々加納藩永井氏の上席家老として仕え、主として江戸詰で、行財政を担当した。慶応年間の分限帳には、一千百石・筆頭家老となっている。幕末の藩主尚服は慶応四年六月に、寺社奉行から若年寄に進んだ。將軍徳川慶喜が賊名を受けたおり、尚服は嫌疑を受けた。長兵衛は老齡であつたが、種々画策して、ようやく藩を存続させた。明治二年議政局執政となつたが、同四年廢藩置県とともに隱退した」(家臣人名事典編纂委員会編『三百藩家臣人名事典(第三卷)』新人物往来社、一九八八年、四三八―四三九頁)。
- (48) 所蔵家の教示によれば、この茶杓と付属する茶会記は、維新後に加納に戻つた篠原長兵衛が遠藤香雨に与えたものとのことである。
- (49) この叢を取納する箱墨書には観阿により「嵯峨棗柳之画 白醉庵(花押)」とある。池田巖『嵯峨棗』淡交社、二〇〇三年、一四二頁。
- (50) 草間直方『茶器名物図彙』彩文社、一九七六年、三二二―三二三頁。
- (51) 「観阿宅座敷は古形を以て造作せり、山城国薪木村酬恩庵一休和尚廟所存在の寺境内に、佐川田喜六といへる者隱遁の地あり、其居所の作事を形取り申候、佐川田は続崎に載せてある人なり、茶室は南都東大寺にある一尾伊織好の形を模せるなり」(前掲注(4) 忘我逸人「白醉庵数寄物語芳村観阿を云ふ」、四三頁)。
- (52) 茶会記から、小堀遠州の書付がある存星袖香合として著名な作品では、現在個人が所蔵する遠州藏帳所載の存星袖香合があるが、観阿による書付などはないとのことである。
- (53) そもそも福祿寿とは、福は子供に恵まれること、禄は財産に恵まれること、寿は長寿に恵まれることを意味する。改めて構図をみてみると「福」を表す童子(子供)、「禄」を表す鶴(財)、「寿」を表す亀(長寿)となる。
- (54) 本図には方印で「楽」の印が捺されている。しかしながら『本朝画史』および山樂研究での先行研究から明らかにされた印譜をみても、この印は確認されない。

(55) 筆跡をみてみると最後の行で墨継ぎをしており、ここが書き出しのような印象を受ける。しかし亡羊の書作品をみると、書き出しは墨を筆にあまり含ませずに書き出して、途中から墨を含ませて書いている。しかも全体的に速筆で書かれており、このあたりが亡羊の筆跡の特徴である。

(56) 前掲注(42) 熊倉功夫、原田茂弘校註『東都茶会記』近代茶会史料集成(二)、四一〇—四一一頁。

(57) 前掲注(31) 林屋晴三編『日本の陶磁(第四卷)』、八九頁。

(58) 収納する箱には観阿による墨書で「観阿 所持(花押)」との記述がある。

(59) 「墨屋助三郎青磁桔梗の香合を神田妙神下にて銀十匁に買取り夫より河内屋喜兵衛が四十匁出して買入れ又これを観阿は五十匁にて買受け更に金十枚に払ひ出せり 是は今より三十年余なれば当時大約二百両位にも相成べき品なり」(前掲注(4) 忘我逸人「白醉庵数寄物語芳村観阿を云ふ」、四八頁)。

(60) 「朽木様御隠居に星橋樽と申せし御方は至て軸物好み多かりき。蘭亭洗硯の図、李龍眠の筆など右御払物より世間に相渡り、此ころ観阿は二十金に買取り。松平周防守様より二百両のお直段を墨屋良助もて被仰聞仕合まで打上り候。其他馬遠の林和靖、李安忠の韃人狩の図等も其中にて見受けたる物ありき」(前掲注(4) 忘我逸人「白醉庵数寄物語芳村観阿を云ふ」、五二頁)。

(61) 前掲注(3) 高橋梅園『茶禪不昧公』、二二二頁。

(62) 詳細は以下を参照。宮武慶之「溝口家旧蔵の大燈国師墨蹟——物我両忘と日山賦を中心に」『文化情報学』第九巻第一号、二〇一三年、九九—一一一頁。

(63) 「新発田藩江戸中屋敷史料中屋敷額解説」江戸東京博物館蔵、資料番号91221104、江戸東京博物館蔵。

(64) 同書によれば、宗中の箱書内容も書かれている。  
茶筆筒外箱蓋うら書写

江月筆跡三不点之茶筆筒転合巻之

什物宗甫所持之品無紛今不堪感情

来由記云二 宗中誌(巻八)

(65) 前掲注(6)。

(66) 宮武慶之「溝口家旧蔵の茶道具拾遺」『文化情報学』第一一巻第一号、二〇一五年、三七頁。

(67) 昭和六年五月一九日、東京美術倶楽部において説田家の売立が記載された。説田家は江戸の酒問屋で多くの道具を所蔵した。その売立目録である『説田家蔵品展観目録』には「九九 祥瑞鳥摘福寿字茶入 溝口家伝来」が所載されており、本品と同定される。宮武慶之「新発田御道具帳にみる溝口家旧蔵の茶道具」『文化情報学』第九巻第二号、二〇一五年、五九—一一二頁。

(68) 宮武慶之「閑極法雲東潤道洵両筆墨蹟について」『アート・リサーチ』第一四号、八九—一〇四頁。

(69) なお溝口家の掛物等の蔵帳である『御掛物帳』『歌書手鑑』の部に「一石州公聞書 一箱」とあり、本品と同定される。

(70) 前掲注(68)。

(71) 翠濤と観阿との交流を考えた場合、溝口家のコレクションには「秋草図屏風(山種美術館蔵)をはじめ、蔵帳に所載される作品でも多くの抱一作品を所蔵しているが、観阿による取次ぎであった可能性がある。

【付録1】 観学院の寿蔵碑文(文字は新字体に直したほか、読みやすさを鑑み句読点を補った)

白醉菴観阿道人墓表

道人名観阿号物外别号指月齋、俗称芳村氏、江戸人也、初名明昭、

俗称太郎兵衛、天資伶俐、頗有文芸、又精陸鴻漸茶道、因称聽笙、蓋取諸袁宗道緩添炉火聽瓶笙之句也、其家多蓄名書古画珍器奇物、以好事而鳴于都下、然而自少時既有出離世間捨妄歸真之念、遂棄懷妊之婦、遺環膝之孩、剃髮着緇、出家而不反、乃結団蕉子郭北淺草而居于此、命其庵曰白醉、其意蓋在乎以喧之暖代酒之醉也、因又称樂此軒云、時年三十四歲矣、其為僧曰、出家珍藏宝悉皆贈与友人而輪之、唯余俊乘坊所親書之化緣簿一冊、而不離身護惜尤甚、俊乘坊名重源、南都東大寺中興弘德之師也

高倉帝、治承四年、本寺權兵燹火焦土矣、

聖武帝所鑄、五丈五尺昆盧遮那仏銅像亦燬銷矣、

帝深憂之、新（つと）召俊乘坊、勅再興之事、乃賜大勸進之号、而募

化四方焉、此簿即其化緣之簿引、所謂勸進牒也、実希世之珍、而価

当連城焉、今大勸進公般

上人聞之、請以千金購求之、道人於是竊以為、吾死之後此牒流落展

轉入于没字碑人之手、則受覆壘之辱不可知也、或遭百六飄廻之厄、

而為六丁所奪去亦不可測也、不如還于娜孃而永与靈

光俱存于本寺也、乃謂上人曰、余今年五十三已過半生矣、且吾上祖

出和州、六世之祖徒于江戸而家焉、於是吾願竈之傍割壽藏地以賜之、

又作換帖一通以付与之、道人大喜、欲立石以表其地、徵文於余曰、

如銘則我俟吾之死而自誌之、請先生惟述其事而已乃為之記、呼道人

亦可謂、奇人矣、

文化十四年歲丁丑夏五月

江戸 龜田与撰

【付録2】 勸學院にある壽藏に、觀阿の没後に加えられた碑文

維明和乙酉九月之望吾以降、今歲戊申六月十九日大夢將覺、人之懷祖吾亦不免也、寧樂之都祖先之所興、況東大之丘乎我葬焉、爰得我所者也、乃自為銘、銘曰、一有江都道人觀阿、傲莊之適、為惠之和、若敖若莽、心醉陸茶肚無陽秋、目無是非、視生如浮、視死如歸、今歸真宅樂土、東大之厓、高一丈者、道人之室耶、觀翁俗称芳村、本吉村也、先考嘗以財徵聘于仙台侯、侯之先君有諱吉村公、以吉芳国説同換之云、翁吾父執也、我識翁于六十二年、今茲將病死、徵書自撰銘、父執之需奚善辭、即書以贈、

嘉永元年戊申秋 江都和氣行藏

【付録3】 弘福寺の墓表

白醉庵苦樂翁觀阿居士、姓は藤原、俗称吉村氏なり。武州江都芝に生る。年若して喫茶の道に精しく、家に古書画珍器等多く蓄へ、其好事普く世にたゞへらる。既に壯年に及ぶ頃ほひ、離世歸真の意ありて、自ら剃髮し居を淺草に占て、世塵を払ひ、常に田甫を愛玩することに於て清高の名称著れ、貴賤の雅客柴門に湊ふ。庵中扁額は不昧源君筆を染て、樂中苦苦中樂と書せらる、又繼ぐに翠濤源君其

他名家列侯も常に庵中をとひて消日の樂となす。しかのみならず、積年仏門に入て、遍く施し広く恵むの志あり。其妻觀勢は浜松の藩士瀧原氏の女にして名を田鶴といふ。貞操伶俐能翁が雅業を佐く。亦翁と共に仏法に帰依して、葛飾牛島弘福禪寺の鶴峰禪師を師とす。ひととせ寺中に□<sup>マ</sup>所の千体仏破壊し、纔に仕が一の残れるを禪師の憂給ふをききて、翁にはかりて其莊嚴を新にす。後三十年の星霜を経て又損失したりしを、弘化二乙巳のとし再び修理を加へ潤色古に復す。その善根を好めること此一事をもてしるべきなり。今年翁齡八十四、觀勢六十八、共に壯健なりといへども、終に世をさらむ時、其骸を取るの地をおもひはかられ、旧師の因によりて堯隣禪師に乞この地を以て墳墓とす。よてこたびその銘を記むことをのぞむ。予有年の因厚により黙止によしなく、拙をわすれて其あらましをしるすことしかり。

于時嘉永元年戊申仲夏 源定絢しるす

応需菟庵法橋書之

表1 観阿の行状

和暦	西暦	観阿 (行年)	事項
明和2年	1765	1	明昭(観阿)、江戸芝で生れる。
寛政10年	1798	34	生家の家業が不振となる。 同年、剃髪して出家する。このとき家財を知友に配る。
文化1年	1804	40	松平不味による谷園中大茶湯で利休堂の茶席を担当する。
文化5年	1808	44	同年夏、「織部切落手鉢」(畠山記念館蔵)を入手する。
文化12年	1815	51	向島弘福寺の改修を行う。
文化14年	1817	53	四月六日、東大寺に重源上人筆「法華勸進状」を寄進。東大寺観学院に寿蔵を建てる。墓題は亀田鵬斎。墓碑銘は酒井抱一による。
文政1年	1818	54	(松平不味没)
文政3年	1820	56	溝口家で道具の鑑定をする。
文政4年	1821	57	溝口家で道具の鑑定を行い信任を得る。正式に出入りするようになる。
文政8年	1825	61	酒井抱一、古筆了伴らとともに烏丸光廣法要に参列する。
文政9年	1826	62	(亀田鵬斎没)
文政11年	1828	64	(酒井抱一没)
文政13年	1830	66	溝口翠濤の茶会に初めて招かれる。
天保5年	1834	70	観阿、七十賀。 好みの瓢薄茶器を百二十五個作成し、知友に配る。
天保7年	1836	72	苦楽翁行楽図を描くよう翠濤、毛利元義に依頼する。 このころ観阿が翠濤に取り次いだ作品では小堀遠州所持「三不点茶箱」、古筆了伴が所持した八幡八幡宮伝来の額「灑」がある。
天保8年	1837	73	先行研究で紹介される自作品では「光悦模し黒瓢筆香合」、光悦模し黒茶碗銘「やれ衣」、黒茶碗銘「残雪」がある。
天保9年	1838	74	先行研究で紹介される作品では観阿好「南蛮ノ切建水」(吉六作)、観阿作「荘子香合」があり、自作品では「乾山写武蔵野半月香合」がある。
天保10年	1839	75	翠濤、観阿宅での茶会に初めて参会する。このとき翠濤の所望により観阿、御本兎耳香炉を献上する。

安政5年	1858					
嘉永1年	1848	84				
弘化2年	1845	81				
天保15年	1844	80				
天保14年	1843	79				
天保13年	1842	78				
天保11年	1840	76				
						<p>先行研究で紹介される自作品では観阿筆一行「三冬枯木花」、観阿筆「達磨画賛」がある。</p> <p>同年、法隆寺円明院に額箱を寄進する。</p> <p>先行研究で紹介される自作品では観阿好「珠光茶碗」（三浦乾也作）がある。</p> <p>この年の元旦に茶杓に「寿」と墨書する（個人蔵）。</p> <p>溝口翠濤、狩野晴川院、小堀宗中の合作を観阿が所望し、作成される。</p> <p>観阿、翠濤へ自筆の短冊を献上する。</p> <p>このころ八十賀記念として知友に配る「一閑張桃蒔絵棗」百二十五個を羊遊齋に依頼か。</p> <p>（毛利元義没）</p> <p>観阿、八十賀。</p> <p>一月七日、翠濤が茶会に参会する。</p> <p>茶会において好みの「一閑張桃之絵細棗」を、知友に配る。細棗のほかに桑昔竹形茶杓を十本作成し、知友に配る。</p> <p>同年七月、古筆了伴が所持した大燈国師墨蹟「日山之賦」を翠濤に取り次ぐ。</p> <p>再び弘福寺の改修を行う。</p> <p>五月二十五日、観阿が翠濤のもとを訪ねる最後の入来となる。</p> <p>以後、老病。</p> <p>観阿没。</p> <p>没する九日前に遺墨として扇面に「苦楽」と認める。</p> <p>翠濤、この遺墨を觀勢に依頼して譲り受ける。</p> <p>没後、勸学院に碑文が追加される。東大寺四月堂に位牌が安置される。弘福寺に墓が建てられ西村藐庵による碑文がある。遺骨は福泉寺にも葬られる。</p> <p>（溝口翠濤没）</p>

表2 売立目録にみる観阿関係の溝口家旧蔵品

番号	所載誌	売立の開催年月日 会場	所載項	作品名	図版
11	『展観入札』	昭和十五年四月五日 京都美術倶楽部	二二三	石川丈山共筒象牙茶杓 白酔庵 了意箱	○
10	〃		四三五	唐物釜鋪 白酔庵観阿箱 溝口家伝来 二枚	
9	〃		三二三	陳元賛墨痕短冊 白酔庵箱 溝口家伝来	
8	『新潟県新発田町安倍家蔵品入札目録』	昭和九年十一月十九日 超願寺	一七五	棕櫚組底板手付籠 溝口家伝来 白酔庵箱	○
7	〃		一二三	時代 桑柄灰匙 箱書付白酔庵 溝口家伝来	○
6	『一木庵高橋家所蔵品入札』	昭和五年十月二十七日 東京美術倶楽部	七七	御本兔耳香炉 白酔庵所持 溝口家伝来	○
5	〃		二四四	織部筋花入 観阿箱 溝口家伝来	○
4	『水戸徳川家音羽護国寺並ニ某家御蔵品入札目録』	大正十年十一月二十八日 東京美術倶楽部	三八	和漢四句 松花堂、澤庵、江月、遠州 了意了音外題 観阿箱 溝口家伝来 竪九寸四分×巾一尺四寸二分	○
3	『東京積翠庵所蔵品入札』	大正四年十一月四日 大阪美術倶楽部	五五一	乾山笹絵向付 五人前 白酔庵所持 溝口家蔵品ノ内	○
2	『高橋家所蔵品入札』	大正七年四月五日 東京美術倶楽部	一五五	染付茶碗 銘腰あられ 白酔庵箱 溝口家旧蔵	○
1	『東都寸松庵主所蔵品』	明治四十五年五月二十七日 京都美術倶楽部	二五五	呉須獅子蓋香炉 白酔庵箱書付 溝口家旧蔵	○